多次元共感性と無愛想印象尺との関連性の検討

楊　柳青（22111386@tama.ac.jp)

1. 問題と目的

先行研究で「無愛想印象尺度の作成―幸福感・共感性・自尊心との関連性の検討」という論文で共感性が高い人か他者に無愛想な印象（コミュニケーション不安，自己呈示に不快感情表出が伴うことが，受け手に無愛想だと感じさせる）をつける傾向も高くなるという結論が得られた。

それになる原因について、調べると共感性が認知的側面と情動的側面の二つの反応傾向があり、これらの反応傾向がまた自・他指向性によって弁別して対人反応も違うことが分かった。そのため、共感性を細分化して研究する必要がある。

本研究の目的は、共感性が他者に無愛想印象を与える傾向に及ぼす影響について、共感性の認知的側面・情動的側面と自己指向性・他者指向性という二つの視点から検討することである。

2. 方法

加藤　みずき先生担当している3,4年ゼミとマーケティングリサーチの学生だちを対象に伊藤　倫の無愛想印象尺度(2021)13項目と鈴木・木野の多次元共感性尺度(2008)24項目を「まったく当てはまらない」から「非常に当てはまる」の5件法で、江田　早紀の対人感受性尺度(2007)39項目を「まったく当てはまらない」から「非常に当てはまる」4件法で共に76項目について、Googleフォームを用いて回答を求め

無愛想印象尺度ではコミュニケーションの観察者や受け手から，無愛想だと認識されやすさすいとされる個人の行動的，心理的な特徴の程度を測定する尺度である。コミュニケーション不安因子「相手の目を見て話すのが苦手だ」「みんなに笑われることが怖い」など8項目、自己呈示因子「人と接するとき、自分の良い点を知ってもらうようにはりきる」「人と接するとき、自分を目立たせようとはりきる」など3項目、不快感情表出因子「嫌いな気持ちの時、それが顔に出てしまう方だ」「イライラしていることが表に出てしまう方だ」2項目で全て3因子13項目で構成される。

多次元共感性尺度では共感性の多次元的アプローチに従い,他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向をそれぞれ他者指向性-自己指向性という視点から弁別的に測定しうる尺度である。被影響性「自分の感情は周りの人の影響を受けやすい」など5項目、他者指向的反応「他人が失敗しても同情することはない」「悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる」など5項目、想像性「空想することが好きだ」「自分に起こることについて、繰り返し、夢見たり想像したりする」など5項目、視点取得「常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている」「人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする」など5項目、自己指向的反応「他人の失敗する姿を見ると、自分はそうになりたくないと思い」「他人の成功を素直に喜べないことがある」など4項目で全て24項目で構成される。

他者感情性尺度では他者の言動、状態に関する過度の敏感さを測定する尺度である。否定的感情性「人が自分を拒絶しているのではないかと不安になる」「自分の言動について批判されるているのではないかどうかと、いつも気にしている」など27項目と肯定的感情性「人が優しそうな顔をしていると安心する」「人が近づきやすい雰囲気だと安心する」など12項目で全部2因子39項目で構成される。

3. 結果予測

認知的な共感に留まる人は、他者に無愛想な印象を与える傾向があると考えられる。
他者志向的な共感性よりも自己志向的な共感性が優勢になり、他者に無愛想な印象を与える原因の一つと考えられる。
対人感受性が高い人は他者に無愛想な印象を与える傾向が高いと考えられる。

5. 引用文献

鈴木有美・木野和代（2008）.「多次元共感性尺度（MES）の作成：自己指向・他者指向の弁別に焦点を当 てて」『教育心理学研究』56、487-497.
伊藤　倫　(2021)・「無愛想印象尺度の作成」PC-132.
伊藤　倫　(2021)・「無愛想印象尺度の作成――幸福感・共感性・自尊心との関連性の検討――」p. 5-20.
河野 荘子・岡本 英生・近藤 淳哉・「青年犯罪者の共感性をどう考えるか」『青年心理学研究』2014、26、60-63
長谷川・寿一（2015）・「共感性研究の意義と課題」，Vol. 58, No. 3, 411-420